



熱帯のすすきが招くキナバルの峰

山本 博之 (京都大学准教授)



日本の国土の約 1.9 倍の面積を持ち、世界で 3 番目に大きな島であるボルネオ島の北端に、サバと呼ばれる地域がある。北海道とほぼ同じ面積を持ち、かつて英領北ボルネオと呼ばれ、1963 年からはマレーシア領のサバ州である。東南アジア最高峰のキナバル山 (4,095 メートル) を含む広大なキナバル公園 (面積 753 平方キロメートル) がユネスコの世界自然遺産に登録されており、類稀なる生物多様性で知られているが、サバ社会もまた文化多様性に満ちた活気あふれる社会である。

▲力強さと美しさを備えたサウスピーク (©photolibary)

サバの玄関口である州都コタキナバルは、1967 年に旧名のジェッセルトンから「コタ・キナバル」(キナバルの街) に改称された。もちろんキナバル山に由来する命名だが、そのキナバル山の名前の由来については、18～19 世紀にこの地を探検した西洋人らの調査報告をもとに、「キナ」(中国) の「バル」(寡婦) を意味し、中国からボルネオ島に嫁いだ王女の物語に由来するという俗説がある。実際には、かつて人が亡くなると天高く聳えるキナバル山に召されると考えていたボルネオ先住民の言葉で「キ・ナバル」(神様) に由来するようだ。もっとも、「中国の寡婦」という俗説が生まれた背景に思いを巡らせるならば、当時の最新技術である蒸気船に乗ってこの地を訪れた西洋人が銃を背景に熱帯産品の取引を迫った頃、この地域の大国だった中国と自分たちの血縁関係を示すことでそれに立ち向かうとしたボルネオ先住民の精一杯の抵抗が垣間見える。

コタキナバルを含め、ボルネオの街はいずれも海沿いにある。古より熱帯雨林は野生動物や疾病が猖獗を極め、人は内陸の河川沿いや海沿いの杭上集落や船上に住んでいた。これらの「山の民」と「海の民」が出会うのが沿岸部で、そこに定期市が立ち、しだいに人が集まって店が作られ、道路や鉄道が敷かれ、街に発展していった。今でも街ごとに定期市が立ち、コタキナバルであれば毎週日曜日の午前中、ガヤ街が「山の民」と「海の民」の出会いと交換の場になっている。

筆者が初めて訪れた 1990 年頃、コタキナバルからキナバル山への交通手段は乗客の数が揃ったら出発する不定期の路線バスしかなく、窓が閉まらず蒸し暑いバスの中で客が集まるのを 1 時間以上も待ったものだった。そこからすすきが風になびく山道を登ると、車窓には「山の民」の世界が広がり、昼間でも初秋のような涼しさのキナバル公園本部事務所 (1,554 メートル) に着く。

ウツボカズラなどを見ながら熱帯雨林の登山道を休み休み登るとラバンラタ宿泊所 (3,273 メートル) に辿り着く。ラバンラタを越えると植物がほとんど見られなくなり、頂上までほぼ 1 枚の大きな岩になっている。標高が最も高いのはロウズピーク (4,095 メートル) だが、その付近にいくつもの頂がある。私の一番のお気に入り力は力強さと美しさを備えたサウスピーク (3,921 メートル) だ。

下山後、キナバル公園内のボーリン温泉まで足を延ばして旅の疲れを癒す。夕方になると付近の若者が集まってきて、ギターを弾き、歌を歌う。鳥を模した「山の民」のスマザウ舞踊を踊り、白濁酒タパイの酒瓶が出てくる。21 世紀になっても変わらない「山の民」の世界がある。



▲ウツボカズラ (キナバル国立公園) (©photolibary)